

令和元年6月21日現在

機関番号：33103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07206

研究課題名(和文)環境会計システムの継続と感情

研究課題名(英文)Continuity and Emotion of Environment Accounting System

研究代表者

岡田 華奈 (Okada, Kana)

新潟産業大学・経済学部・助教

研究者番号：30799929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：環境管理会計の展開の特徴の議論・検討のために既存の研究の検討および定性的研究を行った。まず、「会計における感情研究の理論的射程範囲の究明」のために管理会計における感情と会計の関係に関する研究の文献レビューを行った。また、継続企業の実践に対する経験的研究を行い、マテリアルフローコスト会計(以下MFCA)には、計算実践を通して形成されるコスト意識が継続のメカニズム要素として重要なことを明らかにした。さらに、計算実践が置かれている状況の影響が示唆されることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は二点挙げられる。まず、MFCAの計算的機能の側面に着目し、継続的实践を促進する経済合理的な原理とは異なる原理として社会的な感情の影響を提起した。実践における感情がどのように会計現象に影響を与えているのかについて議論した研究は少なく、MFCAの継続的実施の意義について解釈を深めたと言える。第二に、管理会計研究の領域において着目されている感情と会計の相互作用の議論を環境管理会計の分野に拡張した。本研究の知見を通しては課題として管理会計の分野に対しても計算と実践者の感情、行動がどのような関係にあるのかについて新たな知見を提示したと言える。

研究成果の概要(英文)：In order to consider characteristics of development of environmental management accounting, I conducted literature review and empirical research. First, I conducted a literature review of papers about the relationship between emotion and accounting in management accounting research. It is because to classify theoretical range of emotion research in accounting. In addition, I conducted empirical research on the practice of Material Flow Cost Accounting(MFCA) and point out the importance of cost awareness as a factor of continuity, and the emotion is formed through the calculation practice. Furthermore, I suggested the effect of the situation where the calculation practice is going on.

研究分野：環境管理会計

キーワード：マテリアルフローコスト会計 環境管理会計 感情

1. 研究開始当初の背景

環境管理会計の1つであるマテリアルフローコスト会計 (Material Flow Cost Accounting: 以下 MFCA) は、企業が消費した資源の量を金額として評価し、管理の対象とすることによって、経済と環境の両立を可能にする会計手法として注目されてきた。また、これまでも多くの企業において導入が行われ、国際的にも国内でも高い効果をあげてきた。普及段階を経た今、なる研究領域として、MFCA の継続的な実施に関する考察が議論されている(例えば國部, 2007; 中島・木村, 2012; 東田・國部, 2014 など)。MFCA の継続的な適用を阻害する構造としては、管理可能性原則と経済行動原理との対立が挙げられている。管理可能性原則とは、「従業員が責任を負うべき範囲はその従業員が管理可能な範囲に限定される(國部, 2007, p. 53)」という原則である。MFCA においては、材料のロスであるマテリアルロスが発生している箇所とその原因が生じている箇所が異なるため、ロスが発生していることを認知していても、それを削減する活動に結び付くことができないことが指摘されている(中島・木村, 2012)。また、経済行動原理とは投入コストを下げるための行動と、収益を上げるための行動が比較されたとき、企業は環境負荷の削減よりも将来の収益性を優先してしまう原理を示している(國部, 2007)すなわち、MFCA からの改善案を認識したとしても、優先順位が下がってしまう可能性があることが指摘されているのだ。

MFCA の継続を阻害する構造は経済合理的な視点から説明が可能な一方、MFCA の継続を行っている事例が存在する現実がある。よって、MFCA の継続を可能にし、促進するメカニズムも一方で存在している。このメカニズムを解明することによって、その際、経済合理的な視点とは異なる視点が有効と考えられる。本研究ではそのメカニズムとして MFCA の実践者の感情構造に注目する。「もったいないエンジニアリング」(安城, 2012)と表現されているように、MFCA はコスト削減だけでなく使用資源の効率性を向上することを志向した会計手法である点に特徴をもつ。企業で導入され、利用される際にも、生産の過程で廃棄される資源の無駄を「もったいない」と感じるかどうか重要な要素となると考えられる。しかし、この感情構造がどのようなメカニズムによって MFCA の継続に繋がっているのか、また MFCA とどのような相互作用もたらしているのかについてはまだ研究の余地がある。

以上より、MFCA の学術的、及び実務的な活用面でも重要となる本研究課題を取り扱うことによって、MFCA 研究に対する理解が進むことが求められる。

引用文献

1. 安城泰雄 (2012) 「実践マテリアルフローコスト会計(78)日本 MFCA フォーラム WG3 活動状況報告 WG3 研究テーマ『ME:もったいないエンジニアリング』: 生産革新ツールとしての MFCA」『環境管理』第 48 巻第 3 号, 235-241 頁。
2. 國部克彦 (2007) 「マテリアルフローコスト会計の継続的導入に向けての課題と対応」『国民経済雑誌』第 196 巻第 5 号, 47-61 頁。
3. 中島道靖・木村麻子 (2012) 「による改善活動と予算管理」『原価計算研究』第 36 巻第 2 号, 15-24 頁。
4. 東田明・國部克彦 (2014) 「企業経営における環境と経済の統合と離反 - MFCA の導入事例を通して - 」『国民経済雑誌』第 210 巻第 1 号, 87-100 頁。

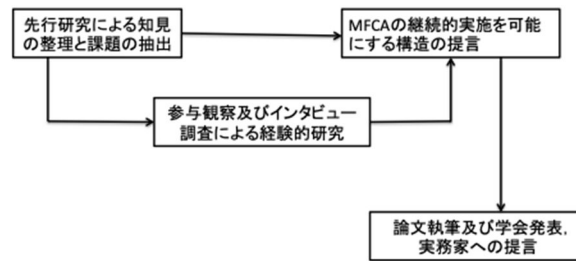
2. 研究の目的

本研究の目的は、環境管理会計の1つ、MFCA の実施継続を可能にする構造として感情の影響を明らかにすることであった。具体的には本研究期間内に次の3つの事項を目的とした。

- (1) 環境管理会計のみならず管理会計分野においても、感情を扱う研究はまだまだ萌芽的段階にあり、理論的課題が明示されていない状況にある。また、理論的基盤も、実践理論、精神分析論、アクターネットワーク理論など多岐にわたる。本研究ではまず、感情構造を分析した管理会計研究をもとに、各理論が捉えるパースペクティブと理論的課題を究明する。
- (2) (1)で明らかにした各理論の特徴と捉えるパースペクティブをもとに、実際に MFCA を継続的に実施している企業において経験的研究を行う。感情とは、一瞬で切り取れるものではなく、行動を通じて観察されるものである。本研究では、企業の MFCA に関わる行動を長期的に観察することによって MFCA の継続を可能にする感情が会計実践や計算を通じてどのように表わされるのかを明らかにする。
- (3) (1),(2)で明らかにした知見をもとに、なぜ企業が環境会計に取り組んでいるのかを明らかにし、MFCA の継続的実施の文脈で議論されてきた管理可能性原則や経済行動原理との対立という課題を克服する方法を検討する。

3. 研究の方法

研究方法の関係図は以下の通りである。



第一段階が管理会計研究における理論的射程範囲の究明である。環境管理会計に限らず、管理会計に関する研究において感情的側面について言及している研究蓄積はほとんどないため、理論的課題が明示されていない状況にある。そこで本研究では、環境管理会計における既存の理論的課題と同時に、管理会計領域までを射程に入れた感情的側面に関する文献のレビューを行い、理論的課題を構築する。記述的表現の理論的根拠を導出することにより、次に実施する経験的研究の問題設定を明確化し、その結果の解釈を深めることに寄与することが考えられる。

管理会計の実施において感情がどのように生じ、また影響を与えているのかを分析している研究群をそれらが依拠している理論的根拠である、アクターネットワーク理論、精神分析論、実践理論などの異なるパースペクティブによって分類し、それぞれの理論が明らかにしている範囲を比較検討する。MFCAだけでなく、環境会計における継続的实施についての先行研究を整理し、環境会計としての継続に関する議論と本研究との関係性を整理し、環境会計研究において貢献が必要な領域を明らかにする。

第二段階は経験的な研究である。実際に MFCA の継続を行っている企業に対して 2 年に渡って定期的な観察・インタビューを行い実施者の感情構造と MFCA の実施との関係を検討する。当研究では、会計実施者の個人の精神的構造に基づいて、会計数値がどう受け止められるのかに着目するのではなく、会計が利用される現場ではどのような感情が生まれるのかを追跡し、感情が会計に与える機能を分析する。また同時に、会計の価値を可視化する機能が感情を介して人をどのように行動させるかを明らかにする。このように、会計と人を同等に相互に作用する存在と考える点が本研究の特徴である。この目的を達成するための分析方法として、環境管理会計の 1 つである MFCA を継続的に実施している企業に対して経験的研究を行った。具体的な手法は以下の通りである。

- (1) 継続的に実施している企業が参加する MFCA 実施に関わる会議に定期的に参加し、MFCA に関わる会議に参加し、計算が行われている現場での参与観察を行った。また、継続企業に対するインタビュー調査を行った。
- (2) 継続的に実施している企業の環境戦略、経営計画、会計ソフトウェア、公表されている財務諸表、環境パフォーマンス尺度などの管理に関わる資料、会議において用いられたパワーポイントなどの資料も分析対象とした。これらの資料から MFCA のどのような会計的特徴が実践者の興味、感情、行動を刺激し、調整されるのかを明らかにする。また実施者のどのような感情が MFCA を継続するという行動を生み出しているのかを明らかにした。
- (3) 限られた数の対象に対して長期の調査を行う(2)の経験的研究と並行して、複数のケースを対象とした傾向分析を行う。具体的には公開された MFCA 事例の文書を対象として、MFCA 導入の前後でどのような言説の変化が起こっているのか分析を行った。MFCA 導入事例の全体傾向と継続企業の傾向との間にどのような違いがあるのかについて分析を行った。

4. 研究成果

本研究では研究目的の(1)、(2)について明らかにした。まず、研究目的(1)である感情構造を分析した管理会計研究をもとに、各理論が捉えるパースペクティブと理論的課題の究明を行った。管理会計研究では、社会学、精神分析論を援用して管理会計が人々の行動を可能にする計算装置としての作用にとどまらず、人々の期待、欲求、新年といった形で感情を構築し、実践の多様性を生み出す側面があることが指摘されている。また、管理会計数値は現場やローワーのマネジャーにとって自身の実感や操作上の知識を用いながら理解が進められるものであり、この理解の中で実践的な感情との相互作用が発生すると考えられることが明らかとなった。この成果は 2018 年 8 月に行われた管理会計学会 2018 年全国大会にて報告を行った。

次に研究目的(2)である(1)で明らかにした各理論の特徴と捉えるパースペクティブをもとにした経験的研究を行った。MFCA の実施に関わる会議に参加し、計算が行われている現場で参与観察を行った。また、継続的適用を行った企業に対してインタビューを行い、MFCA 実施の経験がその後のマネジメントにどのように影響しているか明らかにした。(1)では、管理会計研究において、会計手法は人々の行動だけでなく感情もまた構築し、実践の多様性と繋がるということが指摘

されていた。環境管理の実践では会計装置から算出したロスが物量と金額によって対象化されたことを出発点とし、改善活動や課題を連続的に生み出す行為作用を發揮しているプロセスとして捉えられることは明らかにされているが感情に関する言及はされてこなかった。本研究では経験的研究を通して MFCA という会計計算プロセスを通じて感情もまた構成員に喚起し、処理されていることを新たに明らかにした。具体的には資源の發揮すべき値打ちを未發揮のまま廃棄してしまうことに対する感情である。MFCA が資源生産性を金額として数値的に提示することによって未發揮の感情を喚起し、組織ネットワークが展開する方向性を生み出す。この未發揮を改善する行動は収益性を最大にする行動と対立しない。その結果として MFCA の継続が実現しているのである。この成果は 2019 年に刊行予定の文献成果として報告予定である。

また、追加的な経験的研究として継続企業に限らず複数のケースを対象とした傾向分析を行った。これは全体的な傾向と継続企業での傾向との間に違いがあるのかを検討することを意図したものである。公刊された MFCA 事例の文書を対象として用いられている言説の分析を行ったところ、MFCA の導入前と後で多用される言葉、また同時に用いられる言葉の傾向が異なることが明らかとなった。この成果は 2019 年 3 月に行われた International conference on business, economics and information technology において報告を行った。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

岡田華奈 管理会計学会全国大会「感情と会計：環境会計への拡張」2018 年

岡田華奈・水船公輔 International conference on business, economics and information technology 2019 Singapore “The role of emotions in the practice of Material Flow Cost Accounting (MFCA)” 2019 年。

〔図書〕(計 1 件)

國部克彦・長坂悦敬(編) 岡田華奈・小森尚子・國部克彦(2019) *Japanese Management and International Studies; Vol. 16 Sustainability Management and Business Strategy in Asia*, World Scientific Publishing Company (未刊行につきページ数不明)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：水船公輔

ローマ字氏名：Mizufune Kosuke

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。